

事業紹介・事業報告

地方都市における 長期滞在型空間づくり調査

伊藤 伸一
調査第三部
次長



1. はじめに

Y町は、美しい海岸線と緑豊かな山々に囲まれ、恵まれた自然と共生しながら、農業や漁業を基幹産業として発展してきた町である。町の人口は5,000人弱であり、30年前の昭和45年と比較すると20%近く減少している。こうした過疎化への対応を図るため、交流人口の拡大とそれを活かした地域再生が課題となっているが、町の観光は、海浜公園を中心とした海水浴に大きく依存しているのが現状で、

- ・全国的な海水浴ニーズの低迷
- ・海水浴シーズン以外の利用の低迷

などにより、厳しい状況がうかがえる。さらに来訪者の活動場所は、海浜公園内の施設に留まっており、町全体、あるいは広域的地域の交流人口の拡大に、必ずしも十分結びついていない。

しかしY町の資源は、海水浴だけを魅力とするものではない。海浜公園周辺には、江戸時代初頭の建設技術や地域開発の歴史を現代に伝える歴史的港湾（漁港）が存在する。

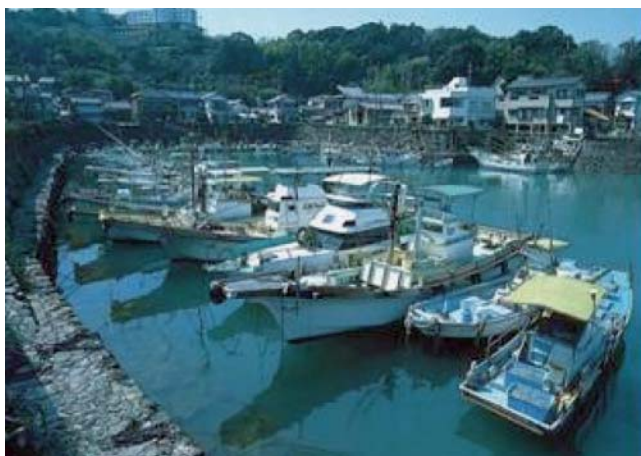


写真-1 歴史的港湾

この港は保存度も大変優れ、我が国最大、最高の歴史的港湾と評価されるものであり、Y町の地域性を物語る上で、なくてはならない資源といえる。その他にも、テ-

ブルサングの群生地、磯遊びの拠点など、海の多様な魅力が存在し、海を楽しむ資源の宝庫となっている。

以上のような地域の特性に基づき本調査では、海岸ゾーンの整備目標を次の2点に定めた。

- ①利用活性化による海浜公園自体の自立型“施設経営”の実現
- ②集客効果の地域波及の拡大による自立自走できる“地域経営”の実現

このような目標を実現するため、対象地域の具体的な将来像を明らかにし、その整備方法等について検討し、基本構想としてまとめることが本調査のねらいであった。

2. 海浜公園及び周辺地区の位置づけ、現況の整理

2.1 観光・レクリエーション条件

当該地域の観光・レクリエーション条件を、以下のよう

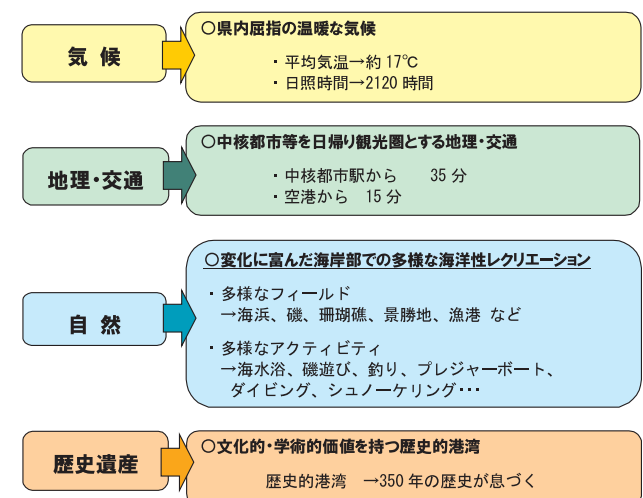


図-1 当該地域の観光・レクリエーション条件

3. 対象地域の課題と整備の方向性

一方で国民の多様化・高度化する観光ニーズや海洋性レクリエーション需要等を考慮すると、町全体の交流人口の拡大、地域活性化に向け、以下のような課題が指摘できる。

①海水浴に過度に依存し、地域資源が有効活用されていない。

- ・周辺の浜、海岸、歴史的港湾、あるいは内陸部の森林資源については、まだその資源性をいかされていない。
- ・管理運営主体も、各施設別々に、多数の団体・組織が関わり、連携が十分確立されていない。

⇒海水浴依存から脱却し、地域の資源を総合化

②交流人口が地域活性化に必ずしも結びついていない。

- ・来訪者と住民の交流活動や経済活動の機会が十分でない。
- ・観光と、本地域の基幹産業である農業、漁業との関連性が希薄である。

⇒域外からの来訪者＝交流人口を活かした都市再生
(地域振興)

対象地区においては、従来の若者を主対象とした海洋性レクリエーションだけでなく、森林レクリエーションや、地域の歴史・文化・生活等あらゆる資源を活用した体験型・学習型観光の魅力を高めることにより、中高年層の来訪も促進していく必要がある。

そのために各各地域資源・施設については、“地域経営”
といった視点から活用方途や運営を見直すとともに、総
合化や有機的連携を図ることが望ましい。



図-2 中核となる海浜公園の概要

4. 整備方針の設定

地域整備方針としては、「海と森と歴史のまるごと体験：地域博物館」とした。これは、地域の有する多様な自然資源や歴史資源、体験資源などを有機的に結びつけ、一体の地域構造やイメージを形成していくであり、モデルとして、フランスが発祥とされる「エコミュージアム」の考え方を参考とした。

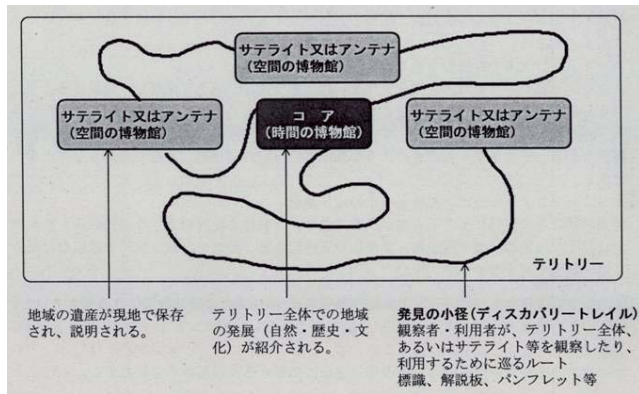
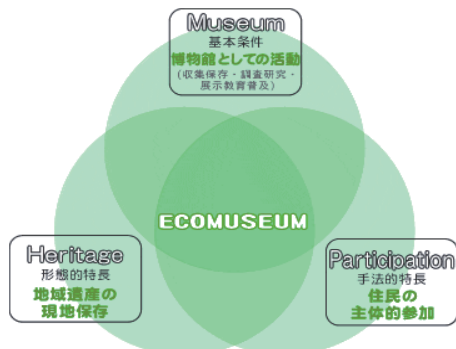


図-3 エコミュージアムの構造

【日本的な定義（日本エコミュージアム協会事務局長・横浜国大太原教授による考え方）】

いくつかの要素がバランスよく機能し、統合化されたものがエコミュージアムであるとし、エコミュージアムを成り立たせるためには、次図のように、3つの要素（M, H, P）全てを併せ持つ中核部分とその周辺部分に位置する実践活動を必要とする。



エコミュージアムの構造（日本的定義）

実際にこの考え方を基に、地域の資源を位置づけたものが、図-4のY町におけるシーライフミュージアムの構成イメージである。道の駅や鉄道駅など交通結節機能を持つことと、海の資源と町を結ぶ立地等を勘案し、海浜公園をコアとして位置づけた。

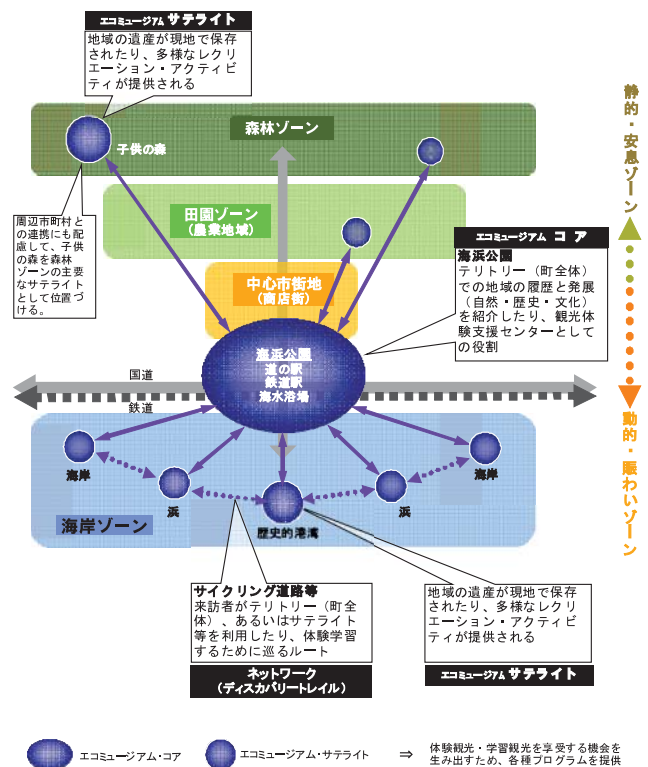


図-4 シーライフミュージアムの構成

今回の提案のポイントは、以下の2点である。

- ・ 体験メニューの創出による滞在の長時間化
- ・ 地産地消による地場産業の振興

(1) 体験メニューの創出による長期滞在化

当該地域でコアと位置づけた海浜公園には、年間約40万人の来訪者がある。しかし、夏場の海水浴かつ日帰り中心となっている。そのため、長期滞在を促すため、利用者のニーズを的確に捉えた様々な体験メニューを創出していく必要がある。

表－1 提案した体験プログラム（海岸ゾーンでの展開分）

体験プログラム名称	体験プログラムの概要
海の自然観察教室	様々な生物が寄り集まって生活している珊瑚礁や磯の生物観察を中心としたガイドツアー。スノーケリング&フィッシュウォッチング
オーシャンハイク教室	海辺の自然を訪ねるハイキングやサイクリングツアー。
海のアート&クラフト教室	シェルアクセサリーづくり、貝の標本づくり、海藻の押し葉づくり、サンドボトル、シェルボトルづくり、流木オブジェづくりなど
サンドモールドイング教室	自然現象による砂の造形を観察したり、砂の造形への挑戦
天体観察教室	海辺ならではの広く澄んだ星空を活かした天体観察教室
ヨット教室	クルージングの魅力や技術を習得
サーフィン教室	サーフィンの魅力や技術を習得
ボードセーリング教室	ボードセーリングの魅力や技術を習得
シーカヤック教室	シーカヤックの魅力や技術を習得
その他マリンスポーツ体験教室	ジェットスキー、ウォークボード、パラセール等のマリンスポーツの魅力体験
手づくりボート教室	手づくりボート、手づくり筏の製作と、それを使った水遊び
フィッシング教室	船釣り、磯釣りなど本格的なフィッシングが楽しめる技術を習得
漁業体験教室	本物の漁、昔ながらの漁法の学習・体験
地引き網体験教室	地引き網体験。収穫物を食材としたバーベキュー等を楽しむ。
魚市場・加工体験	漁協の水揚げや競り、水産加工場の見学・体験
魚の料理教室	魚の捌き方、開き方の習得、漁師料理の体験
歴史的街並み・港ハイク	歴史的港湾及び周辺街並みのガイドウォーキング

本調査においても、珊瑚礁や磯浜・砂浜を活かした自然学習やマリンスポーツ（表－1参照）、さらには里山における炭焼き体験など保有する資源の面から実現性が高く、一般利用者のニーズも期待できる多様なメニューを提案した。しかしこれらの体験メニューは、資源があることだけでは成立できない。メニューづくりと合わせて、地元住民の主体的な参加によるガイドの育成が不可欠である。

(2) 地産地消による地場産業の振興

今回の取り組みの効果を地域全体に波及させていくためにも、地産地消を促進する地域の素材・製品のブランド化と新たな商品開発が求められる。

本調査では、朝獲れの海産物を提供する海鮮レストラン「漁師の台所（仮称）」や、地域の食材・素材を活かした製造販売所の設置等を提案した。

※本調査においては、図－4で示したように各拠点ごとに具体的な整備の方針をとりまとめているが、紙面の関係から本稿における紹介は、省略している。

5. おわりに

このような地方における活性化においては、観光による集客をいかに拡大し、かつ地元経済の再生に結びつけていくかが人口減少社会における地域づくりでは重要なポイントとなってくる。地域における観光資源（自然資源、歴史・文化的資源）は、全国的な訴求力を持つものでなくとも、そこに住民の活動（住民の生活、来訪者へのガイドやホスピタリティ）が加わることにより、多様で変化にとんだ魅力が付加される。今回の調査は、町や地元のNPO団体、町と協力関係を有する大学等の関係者と共に実施したが、こうした実施主体をさらに住民全体に広げていくことが不可欠である。調査期間においては、検討内容の中間報告という形で、住民向けのシンポジウムを開催した。今後事業の実現に向けては、住民とのコミュニケーションを図るワークショップやアイデア募集などを積極的に進め、住民自らが今回の取り組みの主体であるという意識を持つようにしていくことが最も肝要である。

参考文献

- 1) 財団法人社会経済生産性本部、「レジャー白書2004」
- 2) 社団法人日本観光協会、「平成15年度版観光の実態と志向」
- 3) 日本経済新聞社日経産業消費研究所、2004年7月、「観光の街なか魅力度とニーズ－専門家の評価と消費者調査」
- 4) 財団法人日本交通公社、「旅行者動向2003」、2003年7月